世相講談

山口瞳

世相講談

山口瞳

文藝春秋刊

世相講談（せそうこうだん）

昭和四一年一一月一五日　第一刷

定価　三八〇円

著者　山口瞳

発行者　上林吾郎

発行所　株式会社　文藝春秋
東京都千代田区紀尾井町三

印刷　大日本印刷

製本　矢嶋製本

©1966 Hitomi Yamaguchi　Printed in Japan

目

次

生き残り……七
空巣と刑事……二〇
憂世風呂……三二
医は忍術……四五
ある代打男……五八
夜の跫音……七三
将棋渡世……八六
下町にて……一〇〇
旅の終り……一一四

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

栄華は廻る……一二八
橋の下……一四一
最果ての踊子……一五四
人生星取鏡……一六八
遠見と背亀……一八二
葛飾の女給……一九六
チェーホフの熊……二一〇
韋駄天街道……二二四
逝く春や……二三八

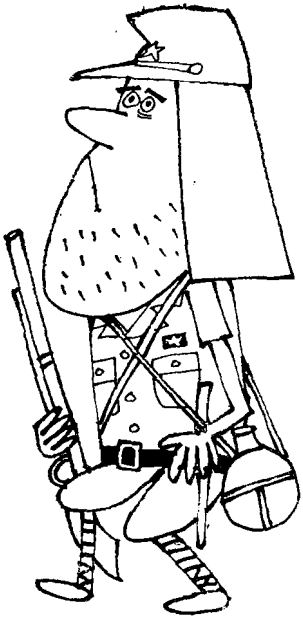
装幀・カット　柳原良平

世相講談

生き残り

I

夏「鳥渡と鳥渡と、お前さん、見て御覧よ、面白いから」
私「一寸、今、手が離せないんだ」
夏「いいから来らっしゃい」
私「全体、如何したんだ」
　漸と腰をあげた。
　隣室のテレビジョンが五輪ピック閉会式の模様を映していた。いましも日本の国旗を某国選手が旗持ちの福島某もろともに担ぎあげてワッショワッショと行進を続けて居る所だった。



私「此奴は豪儀もんだなあ、お夏」
　目を瞬った。
夏「左様でしょう？　だから疾く為なッて言ったろう。彼れ、仰山な事！」
　畏くも天皇陛下を初め奉り、皇后陛下、皇太子殿下御夫妻等皇族方の打揃い御臨場相成るロイヤルボックスの前を疾や整列を乱したる選手団は群集となりて宛然大河に潮の満つるが如くである。
　観客席からどッと笑声が起ったのは、ユーゴスラビア、ベネズエラ等、最後尾の旗持ちを次々に肩に担がんとせし一団がソビエトに迫り、何とか彼の国の旗手をも手車に乗

せようとして果せず、遂に顚倒するさえあるに至ったからだった。其れも其の筈、ソビエトの旗手は世界一の力持ちで〝象さん〟という仇名をもつレオニード・ジャボチンスキーその人であったからだ。

私「ハハハハハ、こりゃ可笑しい」

夏「別嬪さんもいるねえ。鼻が高くて、色なんざ宛然透通る様だ。チャスラフスカかしら、アン・バッカーかしら」

私「あれで処女かな」

夏「また始まったね、ほほほほほ」

私「彼あ云う容貌なら、誰も放棄っとく筈が無いじゃないか」

欣喜雀躍、狂喜乱舞の大行進。ランニング・シャツで突然に疾走だす黒人あり。万歳の型で跳躍る者。麦稈帽子を擲る者。整列んで頻りに叩頭するのはニュージーランド人か。

夏「結構わねえ、平和ってものは」

私「爾う。結構に決まってら」

夏「彼れから二十年ね……見せて遣り度いわねえ……」

私「誰れによ」

夏「皆なによ……」

お夏は急に声も震えて、はらはらと涙が溢れた。

私「可厭だねえ、すぐにお前は其様な哀しい事許し想ってさ」

此方も悲しくなって暗涙んだ眼を慌てて手巾で押えた。

夏「お前さんでも爾うかねえ」

私「否、何、俺のは感激という奴だ。見なよ、流石に日本人だ。赤のブレザー・コート着てよ、服装だって既う一人前だ。びくともしやしねえ。ほら、好い塩梅に雨も止った。素敵な大団円だ」

夏「だけど、此の大混乱騒ぎ。小いっと舐められてるんじゃあるまいか」

私「小っとなら詮方が無い。彼様な事をしたんだから」

夏「見せて遣り度かったねえ。死亡なった方全員に……」

お夏は濡れた目を閉じたので、夫を機に私は室を出た。

ちょうど、そのころ、太平洋上をノースウェスト機が羽田空港にむかっていた。機が空港に着いたのはオリンピック閉会式が終ってから一時間半後だった。あたりはもう真暗になっていた。

十月二十五日の朝日新聞朝刊は次のように報じている。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

「グアム島調査団帰国。
グアム島に〝生存〟を伝えられた元日本兵の捜索のため、厚生省が派遣した調査団の白石権三団長（同省援護局調査課長補佐）、グアム島生き残りの皆川文蔵さん（43歳）ら三人は、二十四日夜七時四十五分、東京・羽田着のノースウエスト機で帰国した。」
どの新聞の扱いも、この程度である。たったこれだけである。

II

その人はとうとう来なかった。その人は遂に私の前に姿をあらわさなかった。
その人の名は中井賢太郎である。

中井さんにはじめて会ったのは、もう十年以上も前のことになる。私はその頃、両国橋を渡って錦糸堀のすぐ手前の酒場へよく飲みにいった。そんな遠くの呑み屋へ通ったのは、絶対に女のためではない。なぜならその呑み屋には女がいなかったし、女の客も滅多には来なかった。
なんとなく好きだった。酒が吟味してあった。二級酒でも充分にうまかった。私がはいっていくと、私より五歳ばかり年長の主人は前掛けで手をふくようなことをしてから指を一本たてた。首をふると、指を二本つきだす。うなずくと二級酒が出てくる。それは東北の地酒で、私にはいい味のように思われた。
指二本でも首をふると焼酎がでてくる。実をいうと、首を二度ふることのほうが多かった。
お新香と湯豆腐がうまかった。こいつがうまいかまずいかは、ちょっとした差である。説明がしにくいが、その店のは親切な味がしたのである。そうして店全体に親切がゆきわたっているように思われた。
遅くなって客のすくないときは、表をしめてしまった。主人は前掛けをはずし、ニコニコしながら、
「飲もうや。一緒に」
と言った。どんなに客が少い日でも、
「ちぇっ！　飲もうや、馬鹿々々しい」
とは言わなかった。
中井さんに会ったのは、そういう夜である。私と中井さんと、もう一人、銭湯の帰りで金盥（かなだらい）を持ったままずうっと飲みつづけている色艶のいい男の三人を残して、主人は表

を締めてしまった。
「飲もうや、飲もうや」
二人の男の顔は知っていた。常連である。みんな酔っぱらってしまった。私がその店を愛好したのはお勘定が安いうえに、私には貸売りを許してくれたせいもある。
みんな親切だった。ひどく酔っていても親切で、余計な世話をやかないで、にこにこしていた。
中井さんは私を家まで車で送ってゆくという。恥ずかしい話だが、私は頭のなかで計算をはじめた。当時の小型車のメーターで家まで四百五十円という距離である。この金がタダになれば大助かりである。充分に翌日も飲めるのである。私の考えが、弱いほうに動きだしていた。
「そんなに酔ってちゃあぶねえや。送ってあげるよ、私が」
中井さんはそう言って先きに出ていった。
「運転手なんだよ」
主人は私のすこし上のところへ視線をやって表をのぞくようにして言った。
「えっ？」
すぐには意味がわからなかった。
中井さんは本当に運転手だった。まるで露地裏にたてかけてあったリヤカーをひきだしてくるようにして、彼はタクシーを店の前につけて待っていた。
中井賢太郎という名前は、車のなかの名札ではじめて知ったのである。
「だいじょうぶかい？」
私は怖くなった。
「大丈夫だよ。酔ってなんかいないよ」
その頃は、その時間になると人通りはなく、車もほとんど通らない。
「いいかい、見てなさいよ、運転はね、線路のうえを通るのが一番むずかしいんだ」
都電の線路の上をはしらせた。右に左に揺れ、私は安全地帯にぶつけやしないかと思ってヒヤヒヤした。
「酔ってたら、こんなこと出来やしないよ」

III

私たちが中井さんと親しくなったのは、次の年の夏である。
やっぱり錦糸堀のそばの呑み屋で飲んでいて、女房と子供を海岸に連れていかなくてはいけないが、往復が面倒で

ね、と言ったのを奥にいた中井さんにきかれてしまった。案外お金がかかってね、とも言ったかもしれない。私は冗談で言ったのだが、中井さんはマトモに受けとったのだろう。私と中井さんとの間にはこういう動かし難い小さな溝があるようだ。

「明日は非番だから……」

彼はいつも電光石火という趣きがあって、これをはねかえすのは不可能のことに思われた。

「君にだって子供がいるんだろう。連れてったかね、海へ」

からんでもムダである。

「なあに、うちの餓鬼は……」

翌日の朝はやく、中井さんは車でむかえにきた。それはタクシー会社の車ではなかった。友人のを借りてきたからガソリン代だけ払ってくれという。

私たちは千葉県の海へ行った。車があるのだから、すいている海岸をえらべばよい。

中井さんは街道筋についてくわしかった。物識りだった。ただし、何か質問すると、うしろをふりむいて答えるので困った。世話になっているのだから文句はいえない。

復りには暗くなって夏子と庄助は車のなかで寝てしまった。

「旦那、南方の海を知ってるかね」

「知らないよ。知るわけないじゃないか」

「きれいだよ」

「南洋かね」

「そう」

「兵隊？　兵隊で……」

「そう。色がね、なんともいえないんだ。深いんだ、とっても深い」

「フカがいるだろう？」

「あんなもの怖くないよ」

「どこ？」

「ベララベラっていう島でね」

「ソロモン諸島かね、ガダルカナルなんかのある？」

「そうだよ。野牛の多い島だった。鏡みたいな海でね、波ひとつないんだ。そいでいて汐の流れが早い。そこでやられたんだ。ダイハツに乗っててひっくりかえされた。だけどよう、死ぬって気はひとつもしなかったね」

「だって深くて流れがはやいんだろう」

「それが不思議なんだ。泳いでいてね、ひょっと気がついたら背がたつんだ」
「えっ、ほんと？」
「ほんとなんだよ、驚いたなあ。海の真中だよ。信じられなかった。下を見たらねえ、灰色なんですよ。砂地でね、灰色なんだ。胸までで背がたつんですよ。驚いたね」
　私は笑った。なんとなく滑稽だった。
「驚いたろうね、そりゃ。そいで助けにきてくれたの？」
「そう。あれは珊瑚海っていうのかねえ。きれいだったなあ。……海の真中にいて、ふいっと背のたつところへ出ちゃったんだなあ」
　自分でもおかしそうに笑った。
「それで、いつ帰ってきたの？」
「昭和二十一年四月」
「わりに早かったんだね」
「そう。原住民虐殺の疑いをかけられるといけないからね。早く帰されたんだね」
「捕虜？」
「捕虜じゃねえんだねえ」
　中井さんは急に情けないような声をだした。
「……」
「PWってのがあるでしょう。あれじゃねえんだ。カボクっていってね」
「カボク？」
「下僕ですよ。下っていう字に僕って字を書いてね」
「それじゃゲボクだろう」
「じゃねえんですよ、下僕っていってましたよ」
「どういうの、それ？」
「ほら、部隊は全滅でしょう。生き残ったのは二人だけですよ。わけわからなくなっちゃったんだ。そういうのを下僕っていってね。シャツの色が草色でね。PWじゃない。私等通信兵だったけど穴の中にこもっていてね、斬込みをかけたんだ。それを、ほら、やっこさんたち知ってんだな。捕虜ともちがうんだねえ」
「どう違うの？」
「配給がちがうんだね。一週間に一箇の罐詰があたるんだが、私等にはこないんだ。食物がちがうんだ。兵隊がつきっきりでね、私等には渡さない。それとね、情を憎むんだね」
「ジョウ？」

「そう。情を憎むんだ、斬込隊の生き残りだから。殴るんだ」

それ以上、そのことをきくのが苦しくなってきた。

「帰ってきて、どうなった」

「栄養失調で目がみえなくなっちゃってね、それとマラリヤで毎日四十度ぐらい熱が出てね。まあ、だいたい一年間でなおったけれどね」

「その人、どうしました、もう一人のひと。だって、二人だけ生き残ったんでしょう？」

「ああ、斎藤っていうんですが、それっきりなんですよ」

「会ってない？　じゃ、いまどうしてるかもわからない」

「そうですよ。会いたいと思ってるんだけど。さあ、どうしているかなあ、顔みりゃわかるんだけど、会わないねえ」

「東京の人？」

「そう。だからよお、こういう商売してるから会いそうなもんだけど」

IV

その後、錦糸堀の呑み屋では、中井さんに二度あっただけだ。会うとそのときの話をしたが、ふたりともすぐに酔ってしまう。

私はその年の大晦日に勘定をすませてからは、その店に行ってない。なぜかというと、その店は繁昌してしまって、雇人を置くようになったからだ。その店はかなり有名にもなった。そうなると、飲みに行っても主人がパチンコ屋へ出かけていて会えずに終るということにもなった。安価で親切という感じはちっとも変らなかったけれど、遠くから出て行って主人にあえないのは実に淋しかった。どんな理由があろうとも主人の不在がちの酒場へは行かないというのが私の主義である。

だから、以下の中井さんの略歴はうろ覚えで間違いが多いと思う。

中井賢太郎は大正八年に小岩で生まれた。

兄弟はない。だから可愛がられた。昭和十二年に商業学校を卒業した。私立大学にはいったが体をこわして一年でやめた。

制服や作業服を大きな会社に売りこむという商売をはじめた。若いのでどこへ行っても相手にされなかった。会社の総務部長を尾行するようなことをした。

たとえば五歳ぐらいの男児がいることを発見すると、子供用の洋服を送りつける。そういう手段で近づいていって大きな商売をすることができた。

その話を中井さんは次のように言った。

「ほら、奥さんが寝物語でね、変な人から子供の服を貰ったって話をするでしょう。その翌々日ぐらいを狙ってたずねるんです。いやあ、あんたでしたか、ってんでツナガリができるんですよ」

徴兵検査は第一乙種。昭和十七年に相模原の八十八部隊に入営。無線通信兵となる。三ヵ月でラバウルに行き混成部隊にはいる。ソロモン諸島のブーゲンビル島に配属され、無線でアメリカ特殊情報をキャッチする。十八年の六月頃、ニュージョージア島の近くのムンダという島に敵前上陸する。ここから先きはもう何年何月ということがわからないそうだ。

洞穴にひそんでいると、コーヒーの匂いがにおってくるくらい米軍は近い。雨の土砂降りの夜に斬込みをかける。七組突入して三組は全滅というようなことをくりかえす。そのうちにラバウルやブーゲンビルでは捕虜になる者が出たらしいが、ムンダ島の兵隊は捕虜にならなかった。そのうちにコロンバンガルへ撤退するために、ムンダ島の某地に集結せよという命令がくだった。そこへ行くまでにジャングルを抜けると十日から十五日間を要するのである。ムンダには七十人か八十人の兵隊が残っていたらしい。しかしコロンバンガルへ逃げられたのは四十人である。ムンダ島を出て海戦になったが小さな船だったので助かった。どうも戦争は終っているらしい。

V

次に中井さんに遇ったのは、去年の十二月である。

駒沢の近くにいる友人の家に不幸があって、帰りにタクシーを拾ったら、その車が中井さんの車だった。

鏡のなかの中井さんの顔をのぞきこんだ。こっちはすでに名札でたしかめてある。中井さんは変な顔をしてから、ニヤッと笑って、急ブレーキをかけた。

「ああ、びっくりした」

「こっちだって驚いたよ」

中井さんにはきいてみたいことがたくさんある。コロンバンガルからラバウルへどうやって集結したのか。部隊が全滅して二人だけ残ったというのは八十八部隊のことなの

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.